

[文教大学]

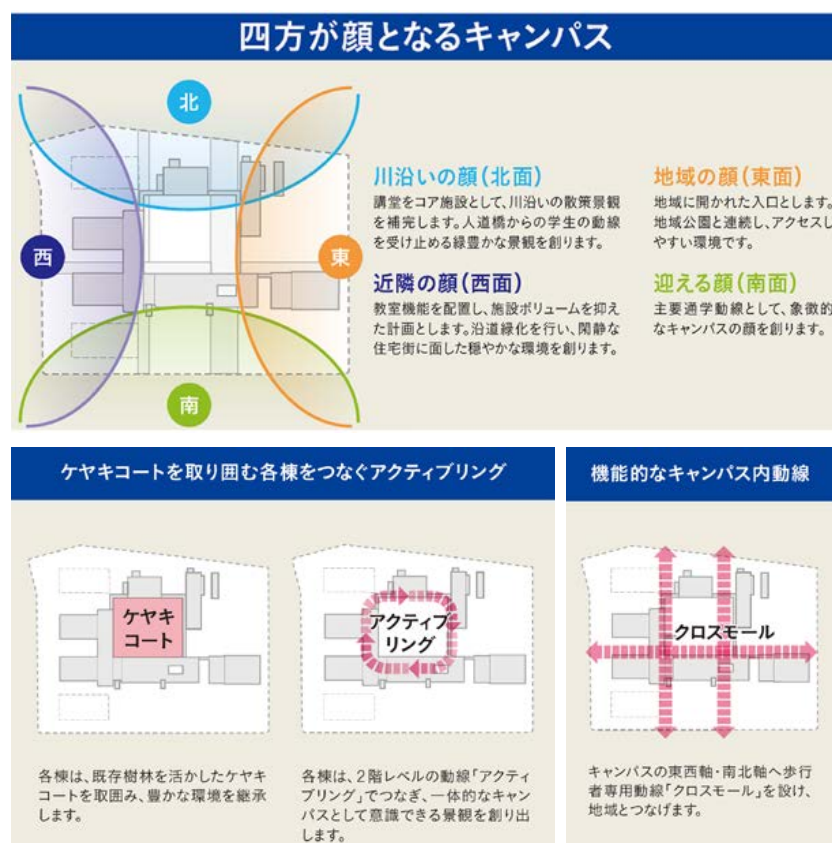
ケヤキコートが育む学生と地域の“わ” —学生生活と地域交流の場—

菅沼 隆昭 文教大学大学事務局局次長

1 キャンパスの特徴・機能

文教大学では、既設のキャンパス（越谷、湘南）に加え、2021年4月に「東京あだちキャンパス」を開設した。東京あだちキャンパスは「地域に開き、地域に溶け込み、学究のフィールドを拡げる」ことをコンセプトの一つとした「地域開放型キャンパス」である。「塀」などを設けず地域と隔たらない外観が特徴的であり、キャンパス中央に学生活動や地域との交流の「場」として「ケヤキコート」と称する中庭を配置した。そこには4本の「櫟の木」があつて、それが愛称の由来である。ケヤキコート内には芝生のエリアを設け、多くのベンチやテーブル・椅子を置いている。校舎はケヤキコートの周囲に配置さ

れ、ケヤキコートを周回する回廊でつなぐ構造としている（アクティブリング）。また、塀のないキャンパスは、四方方向に出入口を有し、ケヤキコートを中心に東西南北へ通路を設けている（クロスモール）。ケヤキコートは、キャンパスの機能的な動線の中心であり、学生・教職員・地域の“わ”をつくる場の役割を持つ。



2 ケヤキコートが学生生活に果たす役割

学生生活においてケヤキコートは様々な機能を持つ。まず、日常の「憩いの場」であり、学生がベンチ等を利用して友人と昼食を共にしたり、会話を楽しんだりする場所になっている。また、「学園祭（華叉祭）」をはじめ学生団体が企画するイベント会場にもなり「賑わいの場」としても機能している。さらに、学生が卒業論文執筆にあたり、社会における広場や公園の機能に着目し、ケヤキコートを題材に「地域におけるオープンスペースの役割と今後の在り方」というテーマで取り上げた例や、教室を飛び出してケヤキコートでゼミの活動を行っている場面も見られ、「学修や研究の場」でもある。このように学生にとってケヤキコートは「成長の場」となっている。

3 地域と大学をつなぐケヤキコート

ケヤキコートは、多少のお断り事項はあるものの、日常的に地域の方々の通行や滞在にご利用いただいている。近隣の幼稚園や託児所のお散歩コースになっていたり、親子連れが遊ぶ様子なども見られたり。利用者からは「広

く安全な場所なのでよく利用している」とのお話を聞く。また、顕著な事例として、本学と包括連携協定を締結している足立成和信用金庫と地域町会との共同開催イベント「はなはた文教マルシェ」では、ケヤキコートをメイン会場としている。このマルシェには、地域事業者、自治体、区内の高校や小学校および本学の学生（ゼミの研究発表者や運営ボランティア）が出展・参加。多くの地域の方々のご来場があり、秋期の恒例行事として地域に定着してきた。

おわりに

地域に開き、溶け込むために様々な工夫が施されたキャンパスは、学生や教職員に地域共生の意識を自然にもたらしていると感じる。本稿冒頭に触れた樺の木はキャンパス開設前からあった足立区の保存樹である。また、キャンパス内には既設キャンパスへオマージュを込めた構造物がある。地域や本学の歴史、先人の想いを感じながら、地域と共に発展するキャンパスでありたいと願う。



はなはた文教マルシェ

[追手門学院大学]

教職学協働でつくる 「居心地のよい」大学

森田 学 追手門学院大学大学事務局教務・学生支援部部長

1 三角形の校舎と屋上広場

1966年、追手門学院大学は大阪府茨木市に茨木安威キャンパスを設け、開学した。

その後、学生数の増加などを背景に新たな校地を求め、2019年に京都と大阪の中間地点にあるJR総持寺駅から徒歩圏内の地に茨木総持寺キャンパスを開設。学院創立130周年記念事業の一貫として、1辺約130mの正三角形を基調とした象徴的な大学棟「Academic Ark」を開設した。さらに2025年4月には新校舎を開設し、収容定員は約9600人に達する。

「Academic Ark」は高さ約22mで、1階に「WILホール」

や紀伊國屋書店、各種窓口を配置し、上層階には教室や「アラムナイライブラリー（図書館）」を備える。最上階中央部には中庭「スカイガーデン」が広がり、OIDA Iモニュメントや芝生、ベンチが並ぶ。春や秋には学生が談笑する姿が見られる。

2 校舎の中央部に広場を設けた理由

本キャンパスの設計コンセプトは、「学びあい、教えあい」が自然に生まれる賑わいの空間を形成することにある。そのため、校舎中央部の機能配置については多くの議論が重ねられた。1階中央部のWILホールは、3カ所いずれのエントランスからも中心で交わる位置にあり、学生や来訪者がくつろぎ、談笑しながら交流を深める場となっている。頭上には図書館を置き、人の流れが交差する場所に知の蓄積の場を設けることで、議論と学びの相乗効果からイノベーションが生まれるよう設計されている。

その上層に位置するスカイガーデンは、学生が集い



Academic Arkの屋上俯瞰図

ラックスする場である。昼休みには友人とランチを楽しむ姿や、テラス席で勉強に励む姿が見られる。校舎中央部は人々が交差する場として設計され、屋上緑化は空調負荷の低減やヒートアイランド対策にも寄与している。

3 学生・教職員で考える “居心地のよい” 大学

スカイガーデンは学生が集う場として設けられたが、当初は緑化エリアのみが広がる空間で、学生たちは芝生に直接座ることが多かった。また、2025年4月の新校舎開設まで茨木総持寺キャンパスはAcademic Ark 1棟での運用だったため、学生の居場所づくりは学生生活上の課題であった。

そこで学友会組織「学友会追風^{おいかけ}」は、学生生活の充実を目的にアンケートを実施。結果、学生が空き時間に求めるのは「休息が取れる環境」「友人と談笑できる環境」であり、平均滞在時間や理想の空間イメージをまとめ、「憩いと出会い」をコンセプトとする新たな居場所創出を提案した。その後、学生支援課や管財課との協議を経て、くつろげるベンチや出入口にスロープ、また人が出会う象徴としてOIDAイモニュメントの設置が決

定。現在では、オープンキャンパスなどのイベントで訪れた人々がモニュメントを背景に撮影し、晴れた日には学生が周辺で昼食をとる光景が日常となっている。この提案を行った、学友会追風は、学生会員と教職員会員で構成される教職協働に学生を加えた、「教職学協働」で運営している学友会組織である。会長は学長がつとめており、総会の中では学生役員が直接学長に提案し、自分達の思いや意見を伝えながら、同じ立場で議論している。

このプロジェクト以後も、学生会員からの提案で学生生活向上の取り組みを展開している。たとえばAcademic Ark内のエリア別の床面色分けによる動線誘導など、学生の声を大学に届ける活動から実現した事例は少なくない。執筆者である私自身も総会では教職員会員として、学生からの提案に対して、同じ立場で議論を行っている。今後も学生の声を直に聞きながら、「教職学協働」で“居心地のよい”大学を目指していきたい。



スカイガーデンの様子

[東京女子大学]

真理を探求し、ともに学びを深める空間

春田 和恵 学校法人東京女子大学大学運営部長

1 VERA広場の概要

正門を入ると目の前に広がる芝生の広場がVERA広場である。

東京女子大学の代表的な卒業生のひとり、瀬戸内寂聴氏が、初めてキャンパスを訪れた時のことを小説『場所』に記している。

「鉄柵のようなさりげない門は、なかば開いていて、誘いこむようななつかしい感じがした。（中略）キャンパスを歩き廻るうち、何が何でもこの学校に入りたいと決意した」

本学は、1924年（創立7年目）に、それまで仮校舎のあった角筈から現在の善福寺に学びの場を移した。キャンパスの建物

群の設計者である建築家アントニン・レーモンドは、正面の本館と本館から左右に両手を広げたように広がる教室棟、そして、門を入った右手手前にチャペルと講堂を配置。それぞれを渡り廊下で繋ぎ、口の字で囲むことによりこの空間を造り出した。キャンパス内には、教員と学生の距離を縮め、ともに学びを深めるための配慮が随所に施されている。休み時間には校舎と校舎を行き交い、天気の良い日には芝生の上で語らう学生たちの声が響いている。

広場の中央には小さな池があり、6月には睡蓮の花が咲き、その水面がピンクに染まる。池の脇には日時計が設置され、キャンパスの歴史と美しさを象徴するモニュメントとしても親しまれている。

2 VERA広場の名称の由来

大学をめぐる環境が変革の時代を迎えた2006年、第1期キャンパス整備計画が策定された。安全で質の高い教育施設の整備、環境に配慮した施設整備、計画的・効果的な整備と施設管理の三原則が打ち出された。このとき、新たに設置されたオープンスペース（学生が憩い集え

る空間。緊急時には避難誘導のスペース」と区別するため、2012年に学生・教職員を対象に名称を募り、本館前庭を「VERA広場」、オープンスペースを「cross広場」と呼ぶことが決定された。「VERA広場」は、正面に佇む本館に刻まれた本学の標語“QUAECUNQUE SUNT VERA”（すべて真実なこと※）から来ている。因みに「cross広場」は本学のキリストの精神を示す「犠牲と奉仕、(Service and Sacrifice)」を表した校章が由来である。真理の探求のための自由な学問の場、一人ひとりが「真実」を感じ取り、学び、尊ぶことを実現するための空間を提供し続けている。

3 VERA広場の四季

4月、講堂で行われる入学式に出席する新入生で溢れかえる。大地震発生を想定した年1回の全学避難訓練では避難場所となる。9月、授業が再開され夏の間に育った青々とした芝が気持ちを新たにした学生たちを迎え入れる。11月、大学関係者、地域の方たちを招き、大学祭VERA祭のメイン会場となる。12月、アドヴェントとともにクリスマスを象徴する本館前のツリーに光が灯さ

れる。3月、色とりどりの袴やスーツに身を包んだ卒業生たちが4年間の学びを胸に巣立って行く。

「キャンパスの環境が落ち着いていて、休日でもきてしまうくらい居心地がよかった」

本学は2028年に創立110年を迎える。この学びの空間をいつまでも守り続けていく。

※新約聖書フィリピの信徒への手紙第4章8節



東京女子大学本館とその前に広がるVERA広場